標識鳥の人（鳥）相書きについて

玉　田　　誠

足環・首環と呼ばれているプラスチック製のカラーバンドを共に喪失してしまい、左右どちらかの足に固定してある金属環のみのオオハクチョウが濤沸湖のみでも1982白鳥年内の２月１日までに７羽が確認された。これ等の鳥の金属環はガイドナンバーが140の旧金属環であり、そのために一連番号（個体番号）を読み取ることはほとんど不可能であって、勿論カラーバンドの記号番号も同定できないことになる。しかし、彼女達が無用の長物であったり、用済みとして何等の顧り見る価値のないものとして等閑に付すことはできない存在である。着標されたための苦痛や多くのハンディキャップをのりこえてきた彼女達をあたたかく見守ってやりたいと思うのである。そのためには「人別書き」のようなものが必要になってくる。又、現時点ではバンドが完備している鳥でも早晩喪失する可能性は多分にあるのだから、きたるべき日に備えてやはり「人相書き」ならぬ「鳥相書き」のようなものを用意しておくことも無意味ではなかろう。

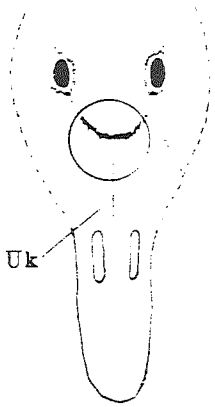
最後に特段の御協力をいただいた日下部正幸会員および岡本俊一の両氏に感謝の意を表する。

濤沸湖に於て、右足の金属環（以下ＭＲと略記）のみが残着し、５羽（４羽？）の幼鳥を伴ったペアが発見されたのは1979年11月８日のことであった。その後1980年３月23日にこのＭＲの記号番号（14001022）の読み取りに成功し、そのカラーバンドの記号番号は１Ｃ22であることが判明したのであるが、それは白鳥がどんどん上陸して遊べた旧き？よき時代でのことであった。同鳥が、その首環（以下ＮＢと略記）でその存在が確認されたのは1978年４月22日が最後であるが、「幼鳥を伴っていたかどうか」については記録されていない。1978白鳥年の濤沸湖での確認記録が皆無なのは、ＮＢを喪失していたためと考えられるが足環（以下ＦＢと略記）も喪失していたかどうかもまたさだかでない。私の注意がＮＢにのみ向けられていたための見落しであった。「１Ｃ22の姿が見あたらない」と感じた時点で、もっと真剣に探査すべきであったと後悔している。

1980年２月28日に濤沸湖で着標された２Ｃ46は、同年同月札幌においてＩＷＲＢの代表者会議と第２回国際白鳥シンポジウムが開催されたこともあって印象一入深い鳥であった。その後順調にリサイトされ、就中厳冬季に濤沸湖の湖面が全面的に結氷すると仲間と共に屈斜路湖に退避するという貴重なデータを提供してくれた。その２Ｃ46のＦＢが喪失していることに気付いたのは1982年２月28日であったが、これは偶然のことであった。1982白鳥年を迎えて、この２Ｃ46が姿を見せないことには12月頃から気付いてはいたが湖心部におり、開水域が北浜付近に限られるようになれば姿を見せるだろうとタカをくくり、若しかしたらＮＢも喪失してしまいＭＲのみとなって見落しているのではないかと思い当ったのは、実に愚な話であるが1983年の１月も23日であって１Ｃ22の得難い教訓をすぐには生かせなかったのである。これより先左足にＭＲのみが残着しているオオハクチョウがしばしば観察されており、1983年１月12日のフイールドノートに左ＭＲとして第１図に示すようなスケッチが残されている。（スケッチがこ

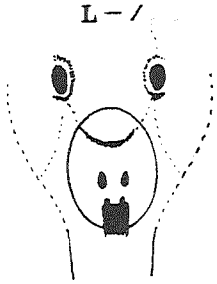
の段階で中絶されているのは、当日ＮＨＫの自然のアルバムー濤沸湖の動物たちーの取材に協力中）。一方別件で昨1981白鳥年のフイールドノートを精査中、早晩２Ｃ46のＮＢの喪失を予期したものか２月28日の日付で２Ｃ46の顔斜正面のスケッチ（第２図）が残されているのを見出したのである。２枚のスケッチを見較べてみると、１月12日の鳥は２Ｃ46との共通点はあるものの、これだけでは２Ｃ46とは断定できないし、以前に４度観察された鳥も２Ｃ46なのか１月12日に観察された鳥なのかも判明せず、文字どおり屋上屋を重ねる失敗である。

○　２Ｃ46は２Ｙ時の着標なのでＭＲは左足に装着されている。



第１図

ＮＢを喪失している２Ｃ53が干潮時に濤沸湖の中州で発見されたのは1982年12月12日であったが、その後確認されなかったので着標地の小湊に渡ったものと考え、畠山氏からのリサイト報告を待っていたところ１月17日に濤沸湖に於て日下部正幸氏が発見、同月30日には玉田もその在湖を確認、今度こそ１Ｃ22や２Ｃ46のてつをふんではならないとスケッチに専念して第３図を得た。２月１日午前このスケッチを手掛りとして、距離約20メートルと30メートルで２回この鳥を確認することができた。



1982年２月28日付けでスケッチされていた２Ｃ46の顔正面

第２図

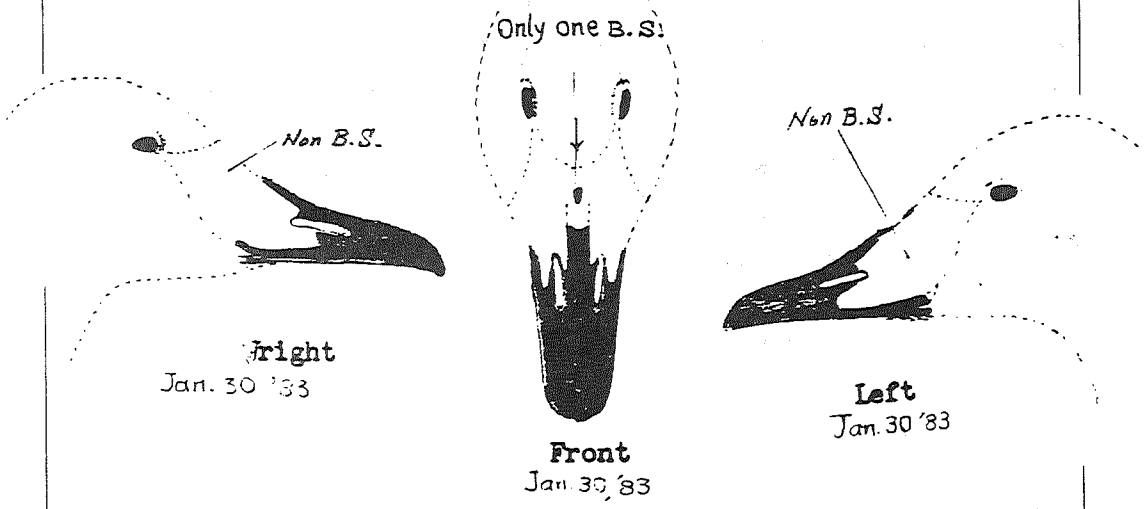
北海道の小沼(大沼)で1979年以来確認されてきた１Ｃ48（1979年12月現在ＮＢなし）は82白鳥年の２月５日現在まだ確認の報に接していないが、その後ＦＢも喪失してしまってＭＲのみとなって一寸目には確認が困難な状態になっているのではないかとも考えられる。１Ｃ48は濤沸湖ではかって確認された記録がないが、右足ＭＲのものが６羽も確認されているので、その中にいたか現在いる可能性もある。健在ならＭＲは右足にあり、その記号は140-01048の筈である。

宮城県迫川の迫大橋の下手で越冬中の２Ｃ74も増森彦介氏からの報告によれば12月９日現在すでにＮＢを喪失しており、又12月23日現在ＦＢも破損しだしたとのことであるから、この鳥も早晩ＭＲのみになるのは必至であると考えられるので、同氏が今のうちに同鳥の鳥相をスケッチとか顔写真のような客観的な方法で明確に記録して爾後のリサイトに備えられるよう希望したい。

第 3 図

			Reference No.	R — 6	
Letters and Ciphers	Neck and Tarsus		Metal ring	Sex	Age
	2 C 53			♀	Ad
Banding	Place	Day Month Year		Remarks	
	KOMINATO	14 Feb. '81		Tarsus Band の脱落を 3 月21日に発見	
Resightings	Place	Location		By	
	Lake TOFUTSU	43° 56' N, 144° 24' E			
	Swan's Period	Octover to May			
	1 9 8 2	Dec. 12、Jan. 17、28 Feb. 1、6、10 Mar. 21、27 Apr. 10、12			
	1 9 8 3				
	1 9 8 4				
	1 9 8 5				
	1 9 8 6				
	1 9 8 7				
	1 9 8 8				
	1 9 8 9				
	1 9 9 0				
	1 9 9 1				
	1 9 9 2				
	1 9 9 3				
	Data of Band Lost	Neck	Dec. 12		
		Tarsus	Mar. 21		(L)

Sketch of face



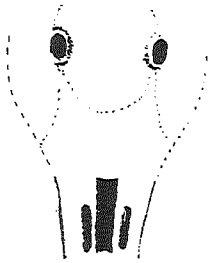
B.S = Black spot = 黒斑点

濤沸湖に於て、1982白鳥年の５月１日までの間に確認されたＭＲのみのオオハクチョウは右足のものが５羽と左足のものが３羽の合計８羽である。左足ＭＲ１羽の分（２Ｃ46？）は第１図として既示したので、残りの６羽の鳥相を第４図ー第10図として次に示す（３面完備のものはまだ１羽のみであるが、識別には役だっている。正面からのものは、斜上方からのもので黒色部の詳細はこの方が適確に表現でき、かつ観察時目線との関係もこの方が有利と考えられる）。

図のＲ－４とかＬ－２のＲは右足にＭＲが、Ｌは左足にＭＲが装着されていることであり、２とか４の数字はそれぞれのコード番号である。

第４図の鳥は1980年３月20日にスケッチされた１Ｃ22のものと同一であり、かつ体形もやや小柄でよく似ている。（１Ｃ22）とすればブリーディングに失敗したのか82白鳥年は単独であって、１羽のみの気楽さからか以前のように給餌場付近にへばりつく姿はあまり見掛けなかった。

Ｒ－１



第４図

カラーバンド（ＮＢ・ＦＢ）の喪失が原因でリサイトから漏れたもののすべてが、落鳥若しくは不明鳥として扱われ、それがかなりの数にのぼるであろうことは今まで見てきたことから明らかである。（濤沸湖では昨1981白鳥年にも１Ｃ22？を除き右ＭＲのもの２羽、左ＭＲのもの１羽が報告されている）。これらの鳥のカラーバンドの記号番号は再捕してＭＲの一連（固有）番号を読み取らない限り明確にはなしえない。又、一度捕獲された経験をもつ鳥の再捕はより困難である。だからといって現実にこうした鳥が眼前に姿を見せている事実から目をそむけることはできないと考える。かってＮＢやＦＢが完備していた頃は「あそこで見られた、こちらに現われた」と貴重なデータを提供してくれた鳥たちである。異端（鳥）視された原因のＮＢやＦＢが取れて、どうにか鳥なみの生活を営み得るようになった彼女たちを今後も可能な限り観察して、その健在を確認してやりたいと思う。

又、一連番号の読み取りが困難な旧ＭＲ鳥の、現在はＮＢ・ＦＢ共に完備しているか、若しくはＮＢ又はＦＢが欠落していても記号番号の確認できる１Ｃ群や２Ｃ群の大半の鳥たちも早晩カラーバンドは喪失する可能性は多分にありＭＲのみの鳥は増加するものと考えられる。

他方、日本に於ける標識鳥の大部分は人工給餌にその総て又は大部分をたよっていることから濤沸湖のような中継地的な所でさえ給餌場に姿を見せるのであって、このことが標識鳥の高い確認率につながっているのである。

以上のことから、今やＭＲのみになった鳥は勿論、まだカラーバンドの完全な鳥についても、バンド喪失後もその存在が確認できるようにと「鳥相書き」のようなものの作成に手をつけた。（今からスケッチなどしておかなくても、その時点でスケッチして山階鳥研の標識研究室に送付すれば、ファイルされている着標時の顔写真からカラーバンドの記号番号を同定してもらえる鳥もあると考えられる）。

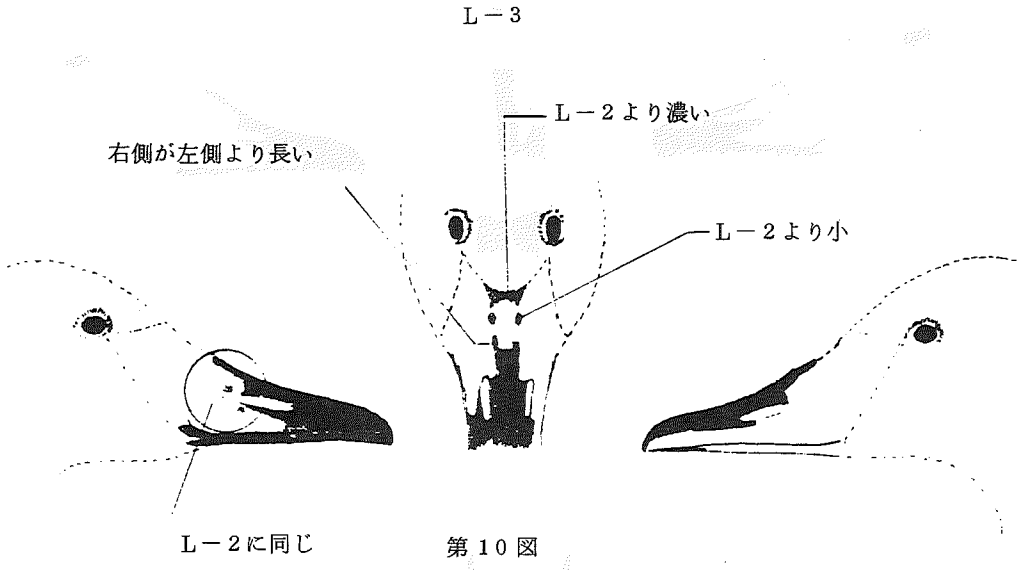
ＭＲのみとなってはリサイトすることは困難ではあるが「あとは野となれ山となれ」ではなく、一般世人はともかく、せめて毀誉褒貶にかかわりなく日夕現場で白鳥たちとかかわり合っている本会会員だ

けでも心して観察して、より多くのＭＲ鳥を見出してその健在を確認してやってほしいものである。

濤沸湖に於て着標されたオオハクチョウは８羽で、内訳はＲ－３羽、（Ｒ）－２羽、Ｌ－３羽である。（Ｒ）は本来Ｌであるが誤着したものである。小湊で着標された１Ｃ22や２Ｃ53が濤沸湖にへばりついているところをみると、ＭＲの喪失鳥がすべて濤沸湖で着標されたものとはいい難い。

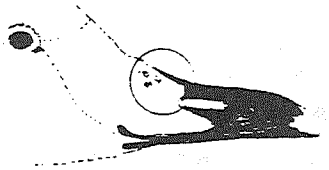
第３図として示した２Ｃ53のスケッチを記入した様式は、濤沸湖で確認された標識鳥の「鳥相書き」の用紙である。ＭＲのみとなった鳥については、その一連（個有）番号が同定されるまで、Letters & Ciphers 及び Bandingの各欄は空欄となり当該ＭＲ鳥の呼び名はＬ－２とかＲ－４ということになる。

ＭＲ＝Metal ring，ＮＢ＝Neck band，ＦＢ＝Foot band



第１０図

R－2



鼻腔後上部に淡い黒斑
3個あり。正面・左側
面はUk

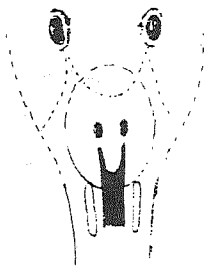
第 5 図

R－3

鼻腔の斜上部に淡い1個
の黒斑あり。
正面・左側面はUk

第 6 図

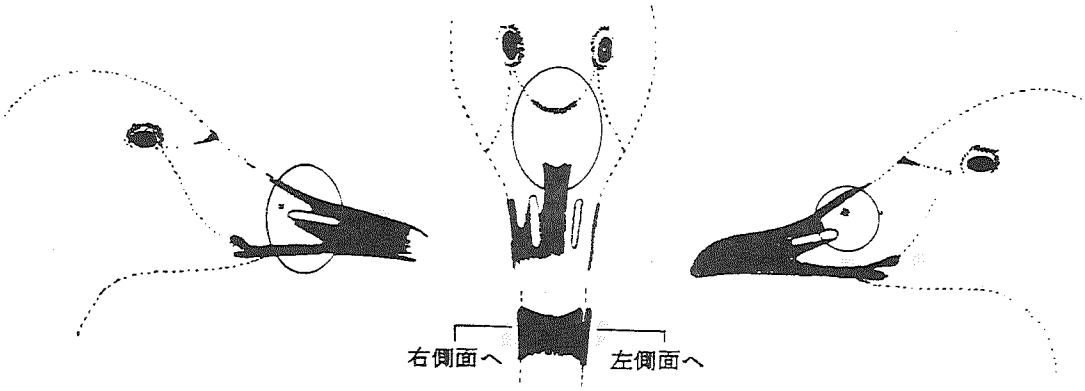
R－4



左右両側面はUk

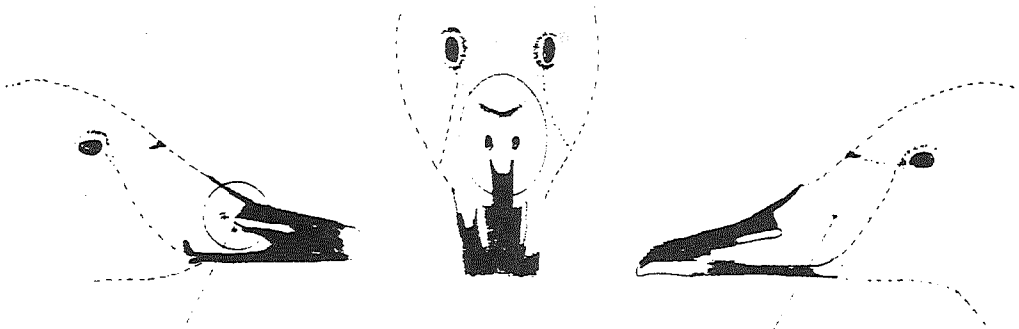
第 7 図

R－5



第 8 図

L－2



淡い黒斑2個

第 9 図

Uk

付表－1　標識鳥の濤沸湖での確認状況　　1982白鳥年

記号番号	確　認　月　日		越冬地
2C01		3月27、29　4月3	小　湊
2C15	11月21、28　12月5	3月10、15、21、27、29　4月3、10、12	小　湊
2C53	12月12	1月17、28、30以下MR－R6に続く	－
2C57		3月15、21、27　4月12、17	小　湊
2C59	11月14		－
2C60	11月21	4月10、12	小　湊
2C90		2月20　3月1、6、13、15、21、27、29　4月3、10	屈斜路湖
2C92	11月9、15、18、19、21	3月5、6、13、15、21、27、29　4月3、10、12	小　湊

付表－2　メタルリング（MR）のみのオオハクチョウの確認状況　　1982白鳥年　濤沸湖

左右の別	コード番号	確　認　月　日	備　考
右（R）	1	11月19　12月5、12、19　1月2、11、12、16	1C22？
	2	12月26	
	3	1月12	
	4	1月30	
	5	2月1、6　3月29　4月10、12	
	6	付表－1の2C53から　2月1、6、10　3月21、27　4月10、12	
左（L）	1	1月12	2C46？
	2	2月1、6、10、11	
	3	2月20　3月6、21、27、29	

付図－1　旧メタルリングの実大図　（1C22）のもの

140　環境庁JAPAN
01022

NB・FBの記号番号に対応させてある一連番号01022の字高は4ミリメートルしかなく刻印も浅い。

◎　4月20日と24日の2回ビルパターンが2C46と同一で無標識の鳥が観察された。この鳥が2C46だとすると付表2の左－1は別鳥か、その後MRも喪失したのであろうか。